

「都立高校中途退学者等追跡調査」
報告書

平成 25 年 3 月
東京都教育委員会

はじめに

東京都教育委員会は、平成 24 年 2 月に『都立高校改革推進計画』を策定しました。その中の施策の柱の一つとして「職業的自立意識の醸成」を掲げ、都立高校に通うすべての生徒が将来の社会を支える意欲や能力を身に付けることを目指して取り組みを進めています。

しかし、その一方で平成 23 年度の都立高校を中途退学した者は、3 千人を超えています。加えて、都立高校を進路未決定のまま卒業した者も 2 千人を超えています。毎年 5 千人以上の者が将来の進路を決めることなく、都立高校を離れていくという状況があります。

そこで、東京都教育委員会は、「都立高校中途退学者と都立高校進路未決定卒業生」に対する追跡調査（以下、都立高校中途退学者等追跡調査という）を実施することとしました。

本調査報告書は、都立高校中途退学者等追跡調査の概要を取りまとめたものです。

本調査は、東京都教育委員会としては初めて中途退学者や進路未決定卒業生本人を対象とし、その意識について調査したものです。

この調査を通じて得たデータを今後詳細に分析・活用し、都立高校中途退学の未然防止と中途退学者等への進路について効果的な支援策を検討してまいります。

平成 25 年 3 月

東京都教育委員会

目 次

第1章 都立高校中途退学者等追跡調査のねらい	
1 高校中途退学問題に関するこれまでのアプローチ	1
2 本調査の基本コンセプト	8
第2章 都立高校中途退学者等追跡調査の概要	12
第3章 調査結果の概要	
1 中途退学者追跡調査結果	13
2 進路未決定卒業生追跡調査結果	25
第4章 調査結果のまとめ	
1 調査結果のまとめ方	30
2 中途退学者追跡調査における各層の特徴	30
3 中途退学者の学校層、学習意欲層とフリーター層の分析	34
4 中途退学者の学校層、学習意欲層とフリーター層 にみる男女の回答差	35
5 中途退学者と進路未決定卒業生との比較	36

資料編

- 1 中途退学者追跡調査結果
- 2 進路未決定卒業生追跡調査結果
- 3 調査票

第1章 都立高校中途退学者等追跡調査のねらい

1 高校中途退学問題に関するこれまでのアプローチ

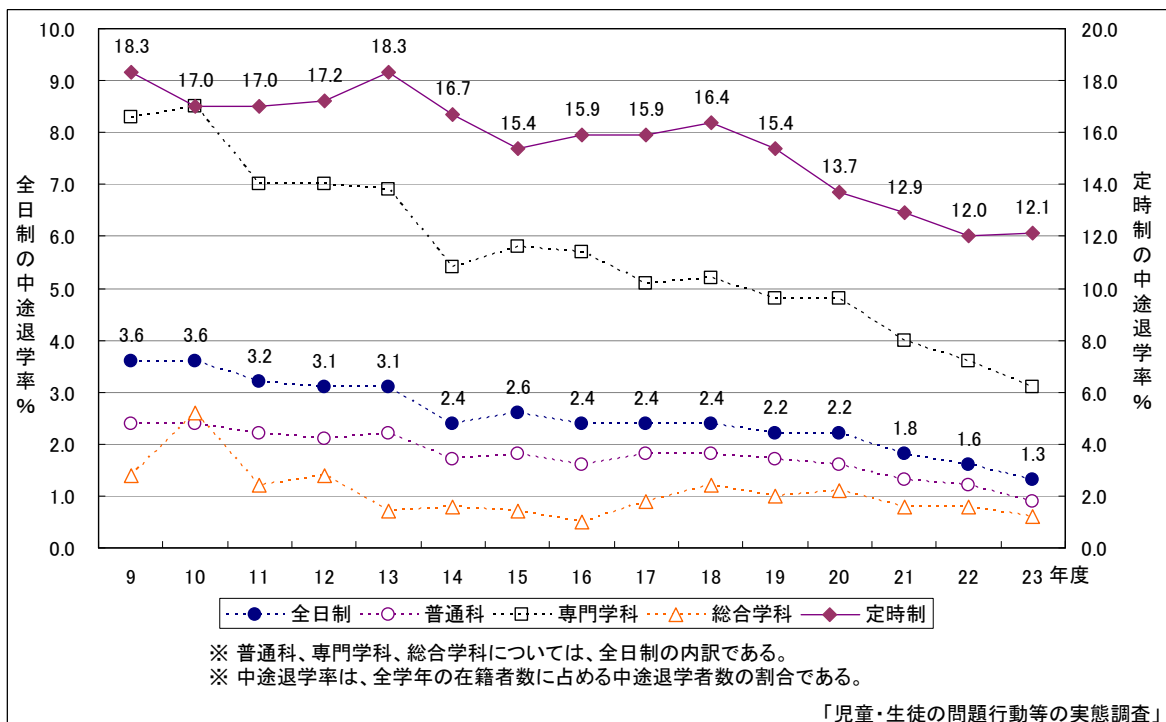
(1) 高校中途退学者数の推移

文部科学省「平成24年度 公立学校統計調査報告書」によれば、平成23年度の公立中学校卒業者の高校への進学率は、97.7%（全国平均）となっている。高校への進学率が90%を超えたのは、昭和49年度（90.8%）であるが、高校への進学率が高まるにつれ、高校教育をめぐる課題も多様化した。

高校中途退学問題もその課題の一つであり、文部省（当時）は昭和57年度から中途退学者数に関する調査を実施している。この調査によると、中途退学率のピークは、平成8～13年度で、2.5～2.6%で推移し、その後漸減傾向にあり、平成23年度は、1.6%となっている。（平成23年度の東京都の中途退学率は、1.6%である。）

都立高校の場合、平成9年度の中途退学率は全日制で3.6%（5,320人）、定時制で18.3%（2,439人）であり、その後中途退学率は減少し、平成23年度には全日制で1.3%（1,543人）、定時制で12.1%（1,794人）となっている。（図表1参照）

図表1 都立高校における中途退学率の推移



(参考)都道府県別中途退学者数及び中途退学率(国公立高等学校)

	都道府県	4月1日現在 在籍者数(人)	中途退学者数(人)	中途退学率(%)
1	北海道	140,684	2,249	1.6
2	青森県	40,621	583	1.4
3	岩手県	38,201	468	1.2
4	宮城県	63,070	1,267	2.0
5	秋田県	29,263	333	1.1
6	山形県	33,723	490	1.5
7	福島県	59,515	603	1.0
8	茨城県	80,875	1,188	1.5
9	栃木県	55,753	1,029	1.8
10	群馬県	54,109	875	1.6
11	埼玉県	175,581	2,891	1.6
12	千葉県	149,018	2,103	1.4
13	東京都	315,980	5,088	1.6
14	神奈川県	199,467	3,135	1.6
15	新潟県	66,094	810	1.2
16	富山県	28,453	375	1.3
17	石川県	32,169	568	1.8
18	福井県	23,695	343	1.4
19	山梨県	27,447	371	1.4
20	長野県	60,194	712	1.2
21	岐阜県	57,000	727	1.3
22	静岡県	101,507	1,579	1.6
23	愛知県	193,091	2,966	1.5
24	三重県	50,658	864	1.7
25	滋賀県	38,615	546	1.4
26	京都府	70,947	1,084	1.5
27	大阪府	227,543	4,967	2.2
28	兵庫県	143,050	2,450	1.7
29	奈良県	38,377	600	1.6
30	和歌山県	29,281	567	1.9
31	鳥取県	16,463	270	1.6
32	島根県	20,020	264	1.3
33	岡山県	54,262	904	1.7
34	広島県	75,331	1,376	1.8
35	山口県	36,315	400	1.1
36	徳島県	20,731	271	1.3
37	香川県	25,720	331	1.3
38	愛媛県	38,976	584	1.5
39	高知県	20,874	448	2.1
40	福岡県	132,695	2,280	1.7
41	佐賀県	26,346	481	1.8
42	長崎県	43,114	723	1.7
43	熊本県	51,219	961	1.9
44	大分県	33,365	580	1.7
45	宮崎県	34,145	553	1.6
46	鹿児島県	50,433	718	1.4
47	沖縄県	48,726	962	2.0
	合計	3,352,716	53,937	1.6

「平成23年度児童・生徒の問題行動等の実態調査」

(2) 高校中途退学問題に対するこれまでの国の対応

文部科学省は、生徒指導上の諸問題の現状を把握することを目的に実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」¹（以下、「問題行動調査」と言う）の一環として、昭和 57 年度から高校中途退学者の把握を行っている。

文部省（当時）が高校中途退学問題への対応方策について本格的に検討を始めたのは、平成元年 7 月に設置した「学校不適応対策調査研究協力者会議」からである。（この会議の報告は、平成 4 年 12 月に出されている。）

当時、国は高校中途退学問題を「画一的な教育や受験競争の激化」がもたらす問題の一つとして捉えていたことがうかがえる。例えば、平成 3 年 4 月の中央教育審議会答申（「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」）では、「高校生の少なくない部分が高校教育に適応できないことである。進学した学校に満足できず、学習意欲がわからないために、学業が進まない生徒が大量に生まれている。中には問題行動に走ったり、学業を放棄して中途退学する者も少なくない」と指摘している。

この中教審答申では高校中途退学者に再挑戦のチャンスを用意する方策として、単位制高等学校の整備や定時制や通信制教育を充実させることを挙げている。つまり、学校教育の多様化、弾力化、個性化という方向を打ち出すことで、高校中途退学問題の解決を図ろうとしている。

この報告を受け、文部省（当時）は、「高等学校中途退学問題への対応について」（平成 5 年 4 月 23 日付文初高第 351 号）という初等中等教育局長名の通知を、各都道府県教育委員会教育長宛てに出し、中途退学問題に対応するに当たって、次のような基本的視点を示している。

¹ 文部科学省の「問題行動調査」は、学校における暴力行為、いじめ、不登校、長期欠席、高校における中途退学者の状況などの問題行動に関して、学校を対象として実施している調査である。「問題行動調査」の高校中途退学者調査では、中途退学者数、中途退学の理由、学年別学科別課程別内訳、中途退学後の進路状況等の項目が設定されている。

高等学校中途退学問題への対応について（平成5年4月23日付文初高第351号）

（中略）

I 高等学校中途退学問題への対応の基本的視点

高等学校中途退学問題に対応するに当たっては、次のような基本的視点を重視することが肝要であること。

(1) 中学校卒業者の95%以上の生徒が高等学校に進学する状況にあり、高等学校生徒の能力・適性、興味・関心、進路等は多様なものとなっており、このような多様で個性的な生徒の実態を踏まえ、高等学校教育の多様化、柔軟化、個性化の推進を図ること。

(2) 中途退学の理由、原因等は個々の生徒により様々であるが、各学校における指導の充実や学校と家庭との連携によってある程度防止できる場合と、就職や他の学校への入学など積極的な進路変更により中途退学するケースなど新たな進路への適切な配慮が求められる場合があり、生徒の状況を的確に把握した指導が重要であること。

(3) 個に応じた指導を進めるに当たっては、生徒の能力・適性、興味・関心、進路等に応じて、理解できる興味のもてる授業を行うなど学習指導の改善・充実に努めるとともに、教育相談の充実、保護者との密接な連携を図ることなどが重要であり、その際、校長のリーダーシップの下に全教職員が協力して取り組む体制を整える必要があること。

(4) 学習指導の改善・充実に当たっては、生徒の主体的な学習意欲を促し、学校生活において様々な達成感や成就感を味わうことができるよう、「参加する授業」「分かる授業」を徹底するなど魅力ある教育活動を展開することが重要であること。

また、新学習指導要領が重視している生徒が自ら考え主体的に判断し行動できる資質や能力を育成していくことに十分配慮すること。

(5) 就職や他の学校への入学など積極的な進路変更により中途退学するケースなど新たな進路への適切な配慮が求められる場合には、生徒の意志を尊重しながら、その生徒の自己実現を援助する方向で手厚い指導を行うことが重要であること。

なお、このような場合には、生徒の積極的な進路変更を可能とするため開かれた学校の仕組みを整えることが必要であり、例えば転校・転科や編入学の円滑な受入れについての配慮が求められること。

また、生徒が進路変更により中途退学しようとしているからといって、十分な状況把握をすることなく安易な指導に流れないように留意する必要があること。

II 高等学校中途退学問題への対応

（以下、省略）

また、文部省（当時）は昭和 61 年度、平成 3 年度、平成 9 年度の 3 回にわたり高校中途退学者進路状況等調査を実施している。この調査の問題関心は、①中学校における進路指導の改善、②中学校と高等学校との間の連携、③生徒の個性を重視した高等学校入学者選抜の改善、④高等学校における適応指導の充実、⑤深い生徒理解に基づく生徒の意識と把握、⑥学習指導の改善・充実、⑦生徒指導の改善・充実といった視点から中途退学者の未然防止を図ろうとするものであった。

文部科学省のこのような方針を受け、各都道府県で取組がすすめられた結果、10 万人を超えていた中途退学者数は平成 13 年度を最後に減少しており、高校中途退学問題は数値上では一見沈静化したように捉えられていた。

こういった文部科学省における高校中途退学問題とは別に、「若年無業者（いわゆるニート）」（15～34 歳の非労働力人口の中から、学生と専業主婦を除き、求職活動に至っていない者）の対策が雇用・就労といった分野の行政課題として注目された。

「若年無業者（ニート）」の問題が提起されるに至ったきっかけは、内閣府が平成 13 年に実施した「青少年の就労に関する研究調査」である。この調査によれば、平成 13 年時点における 15 歳から 34 歳、独身で通学も仕事もしていない者（失業者に相当する者も含む。）は、213 万人に及び、平成 3 年以降の 10 年間で約 80 万人もの増加をみせていた。しかもこの問題が、20～24 歳の人口比で 8.6%、25～29 歳で 7.4% と職業人としての基礎を固めるべき世代に集中的に現れたことに問題の深刻さがあった。

この問題を重要視した政府は、平成 15 年 6 月に「若者自立挑戦プラン」を策定した。若者の高い失業率や離職率、若年無業者（ニート）への対応策として、教育・雇用・産業政策の連携を強化し、若者が自らの可能性を高め、挑戦し、活躍できる社会の実現、生涯にわたり自立的な能力向上・発揮ができ、やり直しがきく社会の実現を目指す方向性が示された。

このような若者の自立を支援するという政策の流れは、平成 21 年に「子ども・若者育成支援推進法」（平成 22 年 4 月 1 日施行）の成立という形で結実する。この法律は、日本として初めて、子供・若者支援に関し、教育・福祉・保健・医療・矯正・更生保護・雇用その他の各関連分野における施策の総合化を図ることを目指していた。この法律で特に強調されたのは「社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者」（第一条）への支援²であった。

「子ども・若者育成支援推進法」の成立過程において、高校中途退学者の問題が注目を集めた。平成 20 年 2 月に政府が策定した「青少年育成施策大綱」において、「高校中途退学者に対する効果的な支援を検討するため、学校との連携協力の下、高校中途退学者の退学後の状況等に関する実態把握調査に努める」こと、「困難を抱

² 子供・若者への支援の基本理念は、「子ども・若者育成支援推進法」第二条に示されている。

えた青少年の継続的な状況把握に取り組む」ことが盛り込まれた。

これを受け、内閣府では平成 21 年 3 月と平成 22 年 3 月に、高校中途退学者へのアンケート調査を実施する³とともに、平成 22 年 7 月には「子ども・若者ビジョン」を策定している。

また、平成 22 年 7 月の内閣府「子ども・若者支援地域協議会運営方策に関する検討会議報告」では、高校中途退学者への対応策について、具体的に以下のような提案をしている。

高校中途退学は、フリーターや若年無業者などの社会的弱者に至るリスクが高く、とりわけ中途退学者の多い高等学校にあっては、彼らを守る最後の砦としての役割を期待したい。そこで、就労支援機関などの地域社会資源と緊密に連携し、高等学校在学中における早い段階から計画的に支援を行っていくことが必要である。

このように、高校中途退学者への対応方針は明確になっている。しかし、中途退学をした本人の意識把握が十分に行われなかったことや、高校との連携が具体的に進まなかったこともあり、有効な施策を打ち出すまでには至っていないというのが現状である。

(3) 都立高校改革推進計画における中途退学問題への対応

東京都教育委員会は平成 9 年 9 月に策定した「都立高校改革推進計画」とこれに基づく二次にわたる実施計画、そしてその後の社会状況の変化を踏まえ平成 14 年 10 月に策定した「都立高校改革推進計画 新たな実施計画」を通じ、総合学科高校、チャレンジスクール、エンカレッジスクール、新たなタイプの昼夜間定時制高校の設置等、生徒一人一人の多様性に対応した弾力的な教育改革を実施してきたところである。

各都立高校においても、弾力的な教育課程の編成や少人数指導等のきめ細かい学習指導、スクールカウンセラーと連携した教育相談体制や生活指導の充実に努めてきたところである。このような新しいタイプの高校の設置や各校における中途退学者数の減少を目指した取組により、都立高校における中途退学率は減少傾向にある。

³ 内閣府は、平成 21 年 2～3 月と平成 22 年 7～9 月に高校中途退学者を対象とした調査を実施している。平成 21 年の「高校生活及び中学校生活に関するアンケート調査」は、緊急的な調査（有効回答数 168 票）であった。平成 22 年の「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）」は、全国の都道府県の公立高校を通じ、2,651 名を対象に調査票を発送、1,176 名から回答を得た（回答率 44.4%）。後者の調査は、中途退学した高校を通じ、本人に事前に連絡を取り、調査への協力を確認したのち、調査票を発送するという方法を取ったため、高い回答率が得られたと推察される（都立高校中途退学者 100 名を対象に調査票を発送しているが、回答数は不明）。

東京都教育委員会は、平成9年度から23年度までを計画期間とした「都立高校改革推進計画」の成果を検証するとともに、現在の都立高校等の状況についても明らかにするため、「都立高校と生徒の未来を考えるために―都立高校白書（平成23年度版）」を作成した。

この冒頭で取り上げたのが「未卒業率」という考え方である。「未卒業率」とは、都立高校に入学した生徒が修業年限（全日制の場合は3年、定時制の場合は3年又は4年）の間に何人中途退学したかを集計したものである。

これまで中途退学者の把握に用いてきた「中途退学率」は、当該年度における全学年を対象とした在籍者に占める中途退学者数の割合を示したものであった。「未卒業率」という見方から生徒の状況を見てみると（図表2）のように、全日制で5.5%、定時制で38.9%が中途退学していることがわかる。

図表2 都立高校における未卒業率

平成20年4月に全日制都立高校に入学した生徒の平成23年3月末の状況 (人)						
	入学者 A	卒業者 B	中途退学者 C	転出者 D	留年者 E	未卒業率 C/A
全日制	40,066	36,424	2,212	1,317	113	5.5%
普通科	30,969	28,712	1,261	918	78	4.1%
専門学科	7,177	5,910	895	345	27	12.5%
総合学科	1,920	1,802	56	54	8	2.9%

※ 普通科、専門学科、総合学科は全日制的内訳である。

平成19年4月に定時制都立高校に入学した生徒の平成23年3月末の状況						
	入学者 A	卒業者 B	中途退学者 C	転出者 D	留年者 E	未卒業率 C/A
定時制	4,387	2,284	1,705	178	220	38.9%

―都立高校白書(平成23年度版)―

都立高校における中途退学者の問題は、以前と比べ、減少はしているものの、少ないと言える状況にはない。

このような状況を踏まえて、東京都教育委員会は、平成24年2月に策定した「都立高校改革推進計画・第一次実施計画」では、「目標Ⅱ 変化する社会の中での次代を担う人間の育成」において、「中途退学の未然防止と中途退学者等に対する進路支援」を掲げた。この中で「これまで都教育委員会では、生徒が都立高校を中途退学するに至った経緯や背景、中途退学後はどのような状況の下で生活しているのかについての把握・分析を行ったことはありませんでした。そこで中途退学者の現況等に関する調査を実施し、中途退学の原因や退学後の状況をきめ細かく把握・分析するとともに、専門的知識や経験を有する外部人材を活用し、中途退学者等の復学などの次の進路決定に向けたサポートをすることにより、若者の再チャレンジを支援します。」と指摘している。これを受け、実施したのが本調査である。

2 本調査の基本コンセプト

(1) 本調査の特徴

本調査は、中途退学者の意識や生活状況を都立高校入学前から中途退学までと、中途退学以降の2つの期間について、質問紙法を用いて把握することをねらいとしている。

加えて、都立高校を進路未決定のまま卒業した者（以下、進路未決定卒業者という。）を対象に同趣旨・同内容の質問紙調査を行うことで、中途退学者が抱える課題と進路未決定卒業者が抱える課題を比較、検討することも目指している。⁴

次頁に掲げた図表3において、文部科学省の「問題行動調査」と本調査（「都立高校中途退学者追跡調査」）の比較を行った。

「問題行動調査」は、都立高校校長を回答者に、高校における生徒指導の参考とするために中途退学問題の発生要因を探るという方法を採用している。具体的には、文部科学省が予め設定した①「学業不振」、②「学校生活・学業不適応」、③「進路変更」、④「病気・けが・死亡」、⑤「経済的理由」、⑥「家庭の事情」、⑦「問題行動等」、⑧「その他の理由」の項目の中から、（都立高校校長が）その生徒が中途退学に至った主たる要因を一つ選択している。

この調査では、(1) 中途退学をした者の見解が把握できていないこと、(2) 高校を中途退学した後、当事者の意識や生活状況が把握できないこと、といった課題がある。

そこで、本調査は、中途退学者本人を回答者として、本人の意識と中途退学後の生活状況について調査した。具体的には、①本人の属性（性別、生年、中途退学した高校、退学時期）、②中途退学者本人の現在の通学や学習状況、就労状況、③高校退学時以降の通学や学習及び就労状況、④中途退学に対する本人の意識、⑤高校進学時の本人の意識、⑥本人自身の将来に対する展望（高校中途退学のリスク認識、就職や復学・高卒認定の取得等への希望等）、⑦本人を取り巻く人間関係、⑧家庭環境及び現在の家庭の状況等を質問項目としている。⁵

⁴ 進路未決定卒業者本人を対象とした質問紙調査は全国初の試みである。

⁵ 本調査の調査設計を行う際に参考としたのは、内閣府が平成23年3月に出した「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）」である。この調査の目的は、「高等学校中途退学者の状況を把握することで、必要な支援の在り方を検討する上での基礎資料とする」というものである。

図表3 文部科学省「問題行動調査」と「都立高校中途退学者等追跡調査」の比較

<p>文部科学省 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の 諸問題に関する調査」</p>	<p>調査名</p>	<p>東京都教育委員会 「都立高校中途退学者等追跡調査」</p>
<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の問題行動等について、調査分析し、教育現場における生徒指導上の取組のより一層の充実に資する。 児童生徒の問題行動等の未然防止、早期発見、早期対応に繋げていく。 	<p>調査目的</p>	<p>退学後の状況、現在の進路希望等に関する意識調査を行い、中途退学未然防止策や中途退学後の支援の在り方検討のための資料とする。</p>
<p>都立高校校長</p>	<p>回答者</p>	<p>都立高校を中途退学した者 (中途退学者本人)</p>
<p>都立高校が、当該年度の途中で校長の許可を受け、又は懲戒処分を受けて退学した者等を対象に行う。予め、文部科学省が設定した「理由の分類」に基づき、中途退学者一人につき、主たる理由を一つ挙げるという方法。</p>	<p>調査方法</p>	<p>「都立高校中途退学者等追跡調査研究委員会」が作成した「調査票(質問紙)」を中途退学者本人に郵送し、本人が回答するという方法。</p>
<p>【調査理由の分類】</p> <p>①「学業不振」</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校入学後、学力不足のために授業の進捗についていけず退学した者に限定 <p>②「学校生活・学業不適応」</p> <ul style="list-style-type: none"> もともと高校生活に熱意がない 授業に興味がない 人間関係がうまく保てない 学校の雰囲気があわない <p>③進路変更</p> <ul style="list-style-type: none"> 別の高校への進学を希望 専門学校等への入学を希望 就職を希望 高等学校卒業程度認定試験受験を希望 <p>④病気・けが・死亡</p> <p>⑤経済的理由</p> <p>⑥家庭の事情</p> <p>⑦問題行動等</p> <p>⑧その他の理由</p>	<p>調査内容</p>	<p>【調査項目】</p> <p>〔問1〕本人の属性</p> <ul style="list-style-type: none"> 性別 ・ 生年 ・ 中途退学した高校、課程、学科 退学時期 <p>〔問2〕中途退学者本人の現在の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> 通学や学習状況 ・ 就労状況 <p>〔問3〕退学してから今までにしてきたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 通学や学習 ・ 就労 中途退学後、学習も就労もしない期間 <p>〔問4〕本人の意識</p> <ul style="list-style-type: none"> 退学した時点での本人の意識 退学した高校を本人がどう捉えていたか 退学した際の相談相手 どのようなことがあれば退学しなかったのか 退学後の若者支援機関の利用状況 <p>〔問5〕高校進学の際の本人の意識</p> <ul style="list-style-type: none"> 中学校時代の生活に関する自己評価(出席状況、成績、部活動への参加) (退学した)高校の志望度 高校に進学する際の本人の意識 <p>〔問6〕今後の進路に関する考え</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校中途退学によるリスク等の認識 就職に関する希望、価値観 今後期待する支援の内容 <p>〔問7〕本人を取り巻く人間関係</p> <ul style="list-style-type: none"> よく話す相手 ・ 悩みごとの相談相手 友人との付き合い方 ・ 自己認識(評価) 人間関係づくり ・ メディア媒体へのアクセス <p>〔問8〕家族</p> <ul style="list-style-type: none"> 同居する家族 ・ 結婚の有無 <p>〔問9〕家庭環境及び現在の家庭の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭状況の把握 ・ 保護者の関わり 家計を主に支える者の仕事内容 家庭の文化資本 ・ 経済的ゆとり

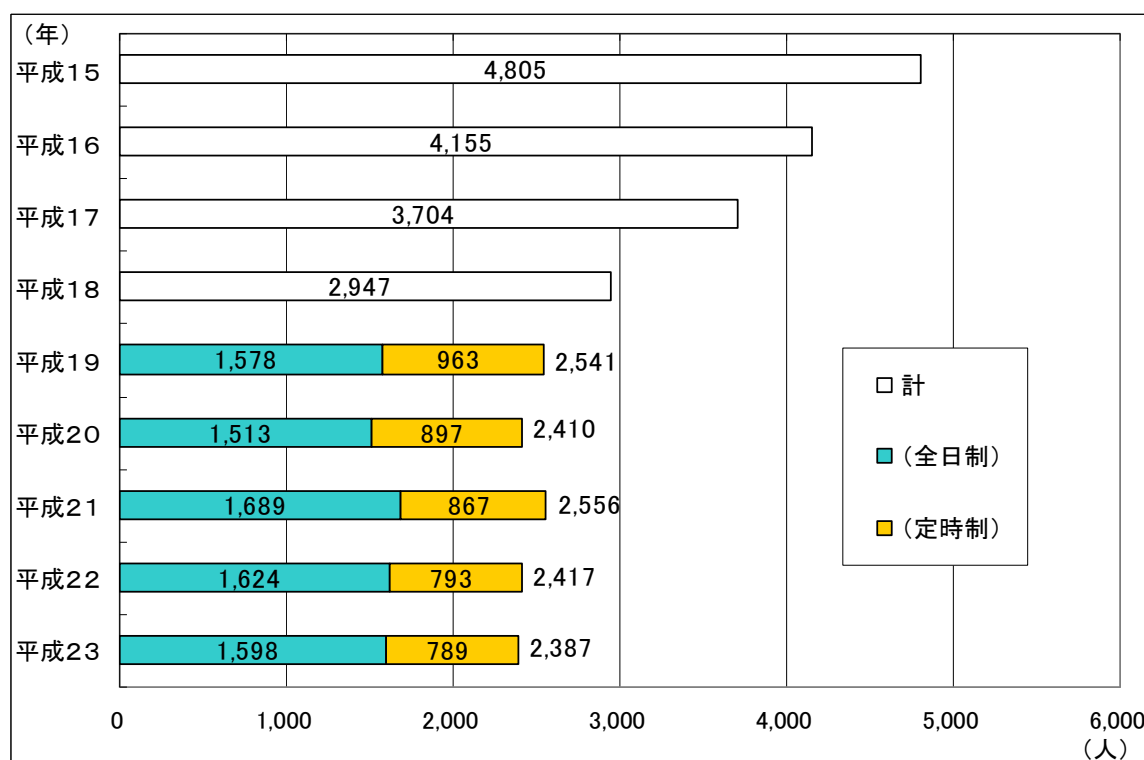
(2) 都立高校進路未決定卒業生⁶追跡調査について

今回、東京都教育委員会が実施した調査では「都立高校中途退学者追跡調査」に加え、「都立高校進路未決定卒業生追跡調査」を実施した。

先に紹介した「都立高校白書－平成 23 年度版－」では、「卒業はするものの、いわゆるニートやフリーターとして正規雇用の職に就かない若年者も相当数いる実態があり、将来社会人として自立するために必要な能力を育成するという目的から見ると、大きな課題である」と指摘している。

都立高校における進路未決定卒業生数の推移を示したのが、図表 4 である。これを見ると、平成 19 年度以降、毎年 2,500 名前後の進路未決定卒業生を出していることがわかる。

図表 4 都立高校における進路未決定卒業生数の推移



⁶ ここで言う「進路未決定卒業生数」の定義は「公立学校統計調査報告書【公立学校卒業生進路状況調査編】」の「一時的な仕事に就いた者」と「左記以外の者（在家庭者・その他）」を合計した数値から「進学希望者」を除いた数値である。

平成 23 年度を例にとると、都立高校の中途退学者数が 3,337 人(全日制 1,543 人、定時制 1,794 人) おり、進路未決定卒業者が 2,387 人(全日制 1,598 人、定時制 789 人) いる。これら多くの生徒が、次の進路を決めることのないまま、都立高校を離れている。

進路未決定卒業者は、「卒業した」という点で中途退学者と異なることから、中途退学者調査の結果と比較し、中途退学者と進路未決定であっても卒業した者との違いを明らかにすることをねらいとして実施することとした。

そのため、調査票は、ほぼ中途退学者と同様の内容となっている。

第2章 都立高校中途退学者等追跡調査の概要

実施期間	平成24年7月～11月	
調査対象	1) 都立高校中途退学者対象	2) 都立高校進路未決定卒業者対象
調査目的	退学後の状況、現在の進路希望等に関する意識調査を行い、中途退学未然防止策や中途退学後の支援の在り方検討のための資料とする。	中途退学者調査と同様の質問項目を設定し、比較検討を行うための資料とする。
調査方法	都立高校からそれぞれの対象者の名簿を提出させ、東京都教育委員会から質問紙を郵送し、郵送により回答を得る。	
調査対象者数	平成22年度と平成23年度に都立高校を中途退学した者 6,947名 平成22年度 3,610名 平成23年度 3,337名	平成23年度都立高校卒業生で進路未決定のまま卒業した者 2,387名
調査票発送数 ⁷	5,526通	1,540通
宛先不明等による不達数 ⁸	674通	136通
回答数	988名	327名
有効回答率 ⁹	20.4%	23.3%

⁷ 都立高校が東京都教育委員会に対象者名簿を提出する際に、転居等のために住所が不明の者等を除いているため、調査票発送数は調査対象者数よりも少なくなっている。

⁸ 宛先不明等による不達は中途退学者で12.2%、進路未決定卒業者で8.8%であった。中途退学（または卒業）後に多数の転居があるという事実は留意が必要である。

⁹ 有効回答率は、回答数を調査票発送数から不達数を減じた数により算出した。

$$\text{有効回答率} = \text{調査回答数} \div (\text{調査票発送数} - \text{宛先不明等による不達数}) \times 100$$

第3章 調査結果の概要

1 中途退学者追跡調査結果

(1) 回答者の基本属性

- ◆ 性別：男性 464名 (47.0%)
女性 515名 (52.1%)
未回答 9名 (0.9%)
- ◆ 通学していた高校の課程
全日制 475名 (48.1%)
定時制 (学年制) 248名 (25.1%)
定時制 (昼夜間) 217名 (22.0%)
通信制 42名 (4.3%)
未回答 6名 (0.6%)
- ◆ 学科：普通科 580名 (58.7%)
専門学科 253名 (25.6%)
総合学科 130名 (13.2%)
未回答 25名 (2.5%)
- ◆ 退学学年：1年生 513名 (51.9%)
2年生 295名 (29.9%)
3年生 107名 (10.8%)
その他 66名 (6.7%)
未回答 7名 (0.7%)

◆ 退学月

	1学年	2学年	3学年	その他	未回答	
4月	12	13	6	3	0	3.4%
5月	20	10	6	1	0	3.7%
6月	17	11	6	3	0	3.7%
7月	35	12	4	1	0	5.3%
8月	25	10	4	1	0	4.0%
9月	30	26	3	5	0	6.5%
10月	44	26	7	3	0	8.1%
11月	36	15	2	2	0	5.6%
12月	50	30	11	4	0	9.6%
1月	44	14	6	3	0	6.8%
2月	27	11	8	3	0	5.0%
3月	158	107	40	34	0	34.3%
その他	2	0	0	2	0	0.4%
未回答	13	10	4	1	7	3.5%
計	513	295	107	66	7	
	51.9%	29.9%	10.8%	6.7%	0.7%	

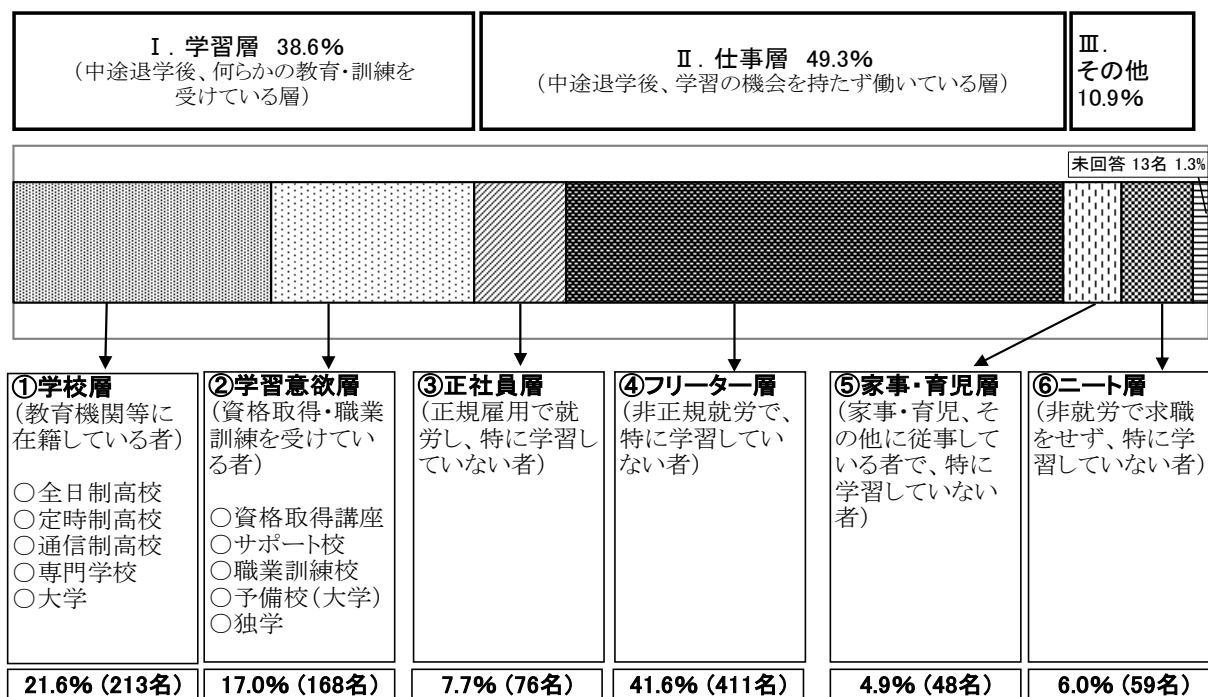
(2) 調査分析の枠組み設定

本調査結果を分析するに当たり、以下の方法で類型化した。(図表5)

[類型化の方法]

- 1) 調査票の問2の(1)及び(2)の「今していること」についての回答状況をもとに、以下のとおり分類した。複数回答があった場合、中途退学者本人の、高校卒業資格や何らかの資格取得といった勉学意欲に応える観点から、教育・訓練を受けている層(①、②)に優先的に分類した。
 - ①学校層(高卒資格等の取得を目指し、高校、大学、専修学校等の教育機関等に通っている層)
 - ②学習意欲層(学校等教育機関等に通ってはいないが、職業的な訓練等〔資格取得を含む〕次の進路に向けた学習に意欲を持っている層)
 - ③正社員層(中途退学後、正規雇用されており、教育・訓練を受けていない層)
 - ④フリーター層(中途退学後、非正規就労をしており、教育・訓練を受けていない層)
 - ⑤家事・育児層(中途退学後、専ら家事・育児に取り組んでおり、教育・訓練を受けていない層)
 - ⑥ニート層(中途退学後、非就労状態であり、教育・訓練もを受けていない層)
- 未回答¹⁰
- 2) 上記1)の分類を大括りに3つに整理した。
 - I 学習層 ⇒ ①、②に該当する層
 - II 仕事層 ⇒ ③、④に該当する層
 - III その他層 ⇒ ⑤、⑥に該当する層

図表5 中途退学者の類型別内訳



¹⁰ 調査票の問2(1)及び(2)で未回答だった者13名(回答者全体の1.3%)を図表5で「未回答」と表示している。

(3) 各類型の特徴

ア 学校層

「I 学習層」[381名 (38.6%)]のうち、「学校層」の中には、就労している者もあり、就労の有無・形態をみるために、①正社員、②非正規雇用、③家事・育児、④働いていないし、求職もしていないといった4つのグループで分類した。(図表6)

〔学校層の特徴〕

- 「学校層」は213名(回答者全体の21.6%)である。
- 「学校層」のうち、95名、約45%が通信制高校に通っている。(定時制高校には46名、約22%、全日制高校には17名、約8%)
- 「学校層」のうち、143名、約67%が非正規就労をしている。

図表6 〔学校層の内訳〕 (名)

		1	2	3	4	5	計
		全日制	定時制	通信制	専門学校	大学	
1	正社員	0	0	1	0	0	1
2	非正規等	6	30	74	23	10	143
3	家事育児	2	1	1	3	3	10
4	働いていないし、求職もしていない	9	15	19	8	8	59
計		17	46	95	34	21	合計 213

学校層の内訳

(学校別内訳)	全日制の高校に通学	17名	}	計 213名
	定時制の高校に通学	46名		
	通信制の高校に通学	95名		
	専門学校に通学	34名		
	大学に通学	21名		
(就労形態別内訳)	正社員で教育機関等に通学	1名	}	計 213名
	非正規就労等で 教育機関等に通学	143名		
	家事・育児をしながら 教育機関等に通学	10名		
	働かずに教育機関等に通学	59名		

イ 学習意欲層

「I 学習層」〔381 名（38.6%）〕のうち「学校層」を除いた「学習意欲層」の中には、就労している者もあり、就労の有無・形態をみるために、①正社員、②非正規就労、③家事・育児、④働いていないし、求職もしていないといった4つのグループで分類した。（図表7）

〔学習意欲層の特徴〕

- 「学習意欲層」は168名（回答者全体の17.0%）である。
- 「学習意欲層」のうち、90名、約54%が「独学」で資格取得等を目指している。
- 「学習意欲層」のうち、107名、約64%が非正規就労をしている。

図表7 〔学習意欲層の内訳〕 (名)

		1	2	3	4	5	6	計
		資格取得	サポート校	職業訓練校	予備校(大学)	独学	その他	
1	正社員	4	1	1	0	3	3	12
2	非正規等	15	12	2	2	63	13	107
3	家事育児	6	1	0	0	3	1	11
4	働いていないし、求職もしていない	0	6	0	8	21	3	38
計		25	20	3	10	90	20	合計 168

学習意欲層の内訳

(内容別内訳)	資格取得のための講座の受講	25名	} 計 168名
	サポート校（高卒認定）に通学	20名	
	職業訓練校等へ通学	3名	
	大学受験のための予備校に通学	10名	
	独学	90名	
	その他	20名	
(就労形態別内訳)	正社員で資格取得を目指す者	12名	} 計 168名
	非正規就労等で		
	資格取得を目指す者	107名	
	家事・育児をしながら		
	資格取得を目指す者	11名	
働かずに何らかの		} 計 168名	
資格取得を目指す者	38名		

ウ 正社員層

「Ⅱ仕事層」〔487名（49.3%）〕のうち、正規雇用されている者を「正社員層」とした。

〔正社員層の特徴〕

○正社員で仕事をしている者は89名（回答者全体の9%）、そのうち、勉強せずに専ら正社員として働いている者は76名である。（回答者全体の7.7% 仕事層の15.6%）である。

エ フリーター層

「Ⅱ仕事層」〔487名（49.3%）〕のうち、「正社員層」を除き、専ら非正規就している者（求職中の者を含む）を「フリーター層」とした。

〔フリーター層の特徴〕

○非正規就労は、661名（回答者全体の67%）おり、そのうち、勉強せずに非正規で就労している「フリーター層」は411名（回答者全体の41.6%）である。

オ 家事・育児層

「Ⅰ学習層」、「Ⅱ仕事層」及び「未回答」を除いた残りの全てを「Ⅲその他」〔107名（10.9%）〕とした。「Ⅲその他」のうち、専ら家事・育児に従事している者を「家事・育児層」とした。

〔家事・育児層の特徴〕

○「家事・育児層」は48名（回答者全体の4.9%）である。

カ ニート層

「Ⅰ学習層」、「Ⅱ仕事層」及び「未回答」を除いた残りの全てを「Ⅲその他」として位置付けた。「Ⅲその他」のうち、家事・育児層を除き、「教育や訓練も受けず、就労を目指した取組もしていない者」を「ニート層」とした。

〔ニート層の特徴〕

○「ニート層」は59名（回答者全体の6%）である。

〔回答者の特徴〕

- (1) 回答者全体の約4割が何らかの形で学習に取り組んでおり（学習層）、約5割が学習せずに就労している（仕事層）。
- (2) 学校層の者の多くは、通信制、定時制に在籍している。
- (3) 学習層のうち、学校層では144名、学習意欲層では119名が、同時に仕事をしているが、その大半が非正規就労である。
- (4) 仕事層の大半（411名）は、非正規就労である。
- (5) 学習層の非正規就労とフリーター層を合わせると、回答者全体の約7割が非正規就労の状態にある。
（学校層の非正規就労143名＋学習意欲層非正規就労107名＋フリーター層の非正規就労411名＝661名で回答者全体の67.0%を占めている。）
- (6) 仕事も学習もしていない者（いわゆる「ニート」）は全体の6%である。

(4) 主な調査分析

ア 中途退学した理由

①退学した時の本人の状況〔調査票 問4-(1)に該当〕

(単位 %)

退学した時を振り返ると、次のようなことはあなたにどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に1つ〇をつけてください。(4件法による質問)	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
A勉強についていけなかった	29.6	36.9	29.0	28.9	33.4	32.2
B遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった	59.1	65.5	63.2	68.8	70.8	57.6
J通学するのが面倒だった	55.4	45.8	64.5	62.1	60.4	52.5
F自分の生活リズムと学校が合わなかった	43.2	37.5	31.6	41.1	33.4	35.6
D友人とうまくかかわれなかった	44.6	38.7	19.7	28.7	22.9	47.4
E精神的に不安定だった	46.9	51.8	23.7	36.2	31.3	57.6
H問題のある行動や非行をしてしまった	20.7	16.0	44.8	23.6	18.8	11.9
I学校から校則違反を注意されていた	24.9	20.8	43.4	29.5	20.9	18.7
L学校とは別に他にやりたいことがあった	30.6	29.8	48.7	29.2	35.4	15.3

※「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の合計の割合を指す。

※60%以上＝濃い網掛け 40%以上＝薄い網掛け

②どのようなことがあれば、中途退学しなかったと思うか(本人の考え)

〔調査票 問4-(5)に該当〕

(単位 %)

今、振り返ってみて、どのようなことがあれば退学しなかったかと思えますか。あてはまる番号にすべて〇をつけてください。	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
人付き合いがうまくできること	36.2	38.7	9.2	27.7	18.8	39.0
友人や仲間からの手助けがあること	16.0	17.3	6.6	11.4	8.3	16.9
先生の理解や応援があること	16.0	22.0	15.8	19.7	12.5	20.3
規則正しい生活ができること	31.9	29.2	26.3	31.1	27.1	32.2
通学しやすいこと	22.1	24.4	30.3	26.5	27.1	18.6
働くための知識や経験が学校で身につくこと	9.9	11.3	23.7	12.2	6.3	16.9
勉強することの意味がわかったこと	20.2	22.0	15.8	26.5	20.8	25.4
学校に自分の居場所があること	31.9	29.8	7.9	20.9	16.7	32.2
何があってもやめていた	14.6	13.1	22.4	15.8	18.8	25.4

※類型ごと、上位3つを網掛け

この2つの質問では、退学した時の本人の状況と、中途退学者自身が自分の高校生活で欠けていたものをどのように捉えているかをそれぞれ質問し、「中途退学」に至った理由をより詳細に把握することをねらいとした。

〔各層において共通した事項〕

①退学した時の本人の状況〔調査票 問4-(1)に該当〕

- ・「B 遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった」、「J 通学するのが面倒だった」の項目が共通して高くなっている。これは、中途退学に至る背景に、中途退学者本人の「基本的な生活習慣の未習得」という課題があることを示している。
- ・各層において、「A 勉強についていけなかった」という項目への回答率は低い。

②どのようなことがあれば退学しなかったと思うか〔調査票 問4-(5)に該当〕

- ・「規則正しい生活ができること」が、全類型で上位に入っていたことが特徴的である。これは、全ての層で高校時代に規則正しい生活ができなかったと考えていることを示しており、①の結果を裏付けている。

〔学校層、学習意欲層、ニート層において顕著だった事項〕

①退学した時の本人の状況〔調査票 問4-(1)に該当〕

- ・「D 友人とうまくかかわれなかった」、「E 精神的に不安定だった」という割合が高い。これは、特に学校・学習意欲層やニート層が中途退学に至る要因の一つには、「対人関係・コミュニケーション」や本人自身のメンタル的な課題があることを示している。

②どのようなことがあれば退学しなかったと思うか〔調査票 問4-(5)に該当〕

- ・「人付き合いがうまくできること」を挙げていたのは、ニート層、学習意欲層、学校層、フリーター層の順に高く、一方、正社員層では低いという状況であった。
- ・これは、①と同様に学習層（学校層、学習意欲層）とニート層は「対人関係やコミュニケーション」について、何らかの不安を抱えている層であることを示しており、①の結果を裏付けている。
- ・「学校に自分の居場所がある」を挙げていたのは、ニート層、学校層、学習意欲層の順に高く、学校内に自分の居場所を確保することができなかったことを示している。

〔正社員層において顕著だった事項〕

①退学した時の本人の状況〔調査票 問4-(1)に該当〕

- ・「H 問題のある行動や非行をしてしまった」、「I 学校から校則違反を注意されていた」といった「反学校的行為」の回答率が他の層と比べて高い。
- ・「D 友人とうまくかかわれなかった」「E 精神的に不安定だった」は低く、「L 学校とは別に他にやりたいことがあった」が高い。

②どのようなことがあれば退学しなかったと思うか〔調査票 問4-(5)に該当〕

- ・「働くための知識や経験が学校で身につくこと」の回答率が他の層に比べて高い。
- ・逆に「人付き合いがうまくできること」「学校に自分の居場所があること」が他の層に比べて低い。

〔その他の特徴〕

②どのようなことがあれば退学しなかったと思うか〔調査票 問4-(5)に該当〕

- ・正社員層やフリーター層、家事・育児層で上位を占めたのは「通学しやすいこと」であった。これは、「基本的な生活習慣の未習得」という問題と関係があると考えられる。
- ・「何があってもやめていた」と回答したのは、正社員層、ニート層で割合が高かった。

イ 中途退学した高校を志望していたか〔調査票 問5-(2)に該当〕(単位 %)

退学した高校をもともと志望していましたか。それぞれについて、 あてはまる番号に1つ0をつけてください。(4件法による質問)	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
	54.5	64.9	46.0	59.3	62.5	67.8

※「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の合計の割合を指す。

※60%以上＝濃い網掛け 40%以上＝薄い網掛け

この質問では、通学していた高校に進学した時点での志望の程度を把握することをねらいとした。

- ・学習意欲層(64.9%)、家事・育児層(62.5%)、ニート層(67.8%)では、6割以上の者が進学した学校を志望していた。
- ・高校への志望動機の程度は、このデータから読み取ることができないが、正社員層(46.0%)を除けば、おおむね半数以上の者が退学した高校への進学を志望していた。

ウ 退学した高校に進学する時の本人の考え〔調査票 問5-(3)に該当〕(単位 %)

振り返ってみて、退学した高校に進学する時にあなたはどのような考え方をもっていましたか。それぞれについて、 あてはまる番号に1つ0をつけてください。(4件法による質問)	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
A好きな学科や勉強したい学科があった	29.6	36.9	28.9	29.0	33.3	32.2
C成績で進学先を決めた	62.4	57.7	48.7	63.5	54.2	39.0
H高校に進学するのは当たり前だと考えた	70.9	76.8	56.6	62.0	47.9	54.2
I高校は将来の人生に役に立つと思った	71.4	72.0	59.2	62.0	60.4	64.4
J高卒の学歴が必要だと思った	77.9	81.5	68.4	72.7	77.1	69.5
Kなんとなく進学することにした	52.6	50.6	60.5	56.0	62.5	55.9

※「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の合計の割合を指す。

※70%以上＝濃い網掛け 50%以上＝薄い網掛け

この質問では、中途退学者自身が高校進学について、どのような意識を持っていたかを把握することをねらいとした。

〔各層に共通した事項〕

- ・いずれの層も「H 高校に進学することは当たり前だと考えた」、「I 高校は将来の人生に役に立つと思った」、「J 高卒の学歴が必要だと思った」と答えている割合が高い。(ただし、正社員層は比較的低いデータが出ているが、半数以上は肯定的な回答をしている。)また、「K なんとなく進学することにした」と回答したのもいずれの層でも5割を超えている。
- ・特に学校層、学習意欲層の「H 高校に進学することは当たり前だと考えた」、「I 高校は将来の人生に役に立つと思った」、「J 高卒の学歴が必要だと思った」の回答率は特に高く、高校への進学を肯定的に捉えていた。
- ・一方で押しなべて回答率が低いのが「A 好きな学科や勉強したい学科があった」という質問である。この質問に対しては、いずれの層においても3割前後の回答率である。

エ 中学時代の生活はどうだったか〔調査票 問5-(1)に該当〕(単位 %)

中学時代の生活はどうでしたか。それぞれについて、 <u>あてはまる番号</u> に1つ0をつけてください。	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
(1)出席状況はどうだったか	62.0	50.6	61.8	56.4	54.2	30.5
(2)成績はどうだったか	43.7	50.0	30.3	27.0	25.0	23.7
(3)部活動に取り組んでいたか	57.3	51.2	52.6	47.0	37.5	18.7

※「とてもよかった(よくやった)」、「まあよかった(よくやった)」の合計の割合を指す。

※60%以上=濃い網掛け 40%以上=薄い網掛け

この質問では、高校入学前の中学校生活の状況を(1)出席状況、(2)成績、(3)部活動の観点から把握することをねらいとした。

- ・学校層や学習意欲層においては、(1)出席状況、(2)成績、(3)部活動のいずれも肯定的な回答の割合は高かった。
- ・正社員層、フリーター層、家事・育児層、ニート層では、自分の中学校時代の成績に対して否定的な見解の方が多い。
- ・ニート層では、(1)出席状況、(2)成績、(3)部活動のいずれも肯定的な回答率は低く、高校入学前の義務教育の段階からの「つまずき」が見てとれる。

オ 中途退学後の若者支援機関の活用状況〔調査票 問4-(6)に該当〕(単位 %)

退学してから今までに、若者を支援するための次のような機関や施設、サービスを利用したり、訪問したりしたことがありますか。 あてはまる番号にすべて0をつけてください。	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
ハローワークやジョブカフェ	6.6	16.1	26.3	16.1	20.8	6.8
職業訓練支援センター	0.5	2.4	5.3	1.2	2.1	0.0
病院(心療内科など)や精神保健福祉センター	12.2	16.1	1.3	4.6	6.3	20.3
カウンセラーや心の相談機関	8.5	8.3	1.3	3.4	0	11.9
退学した学校	12.7	9.5	2.6	4.1	4.2	0.0
特に利用したことはない	64.8	54.8	72.4	71.3	68.8	66.1

※類型ごと、上位3つを網掛け

この質問では、中途退学後にどのような機関からの支援を求めたかを把握することをねらいとした。¹¹

〔各層に共通した項目〕

- ・若者支援機関を「特に利用したことはない」という回答がいずれの類型においても圧倒的に高いことが挙げられる。

¹¹ 若者支援機関の代表的なものの一つとして、調査票においては「地域若者サポートステーション」(厚生労働省の事業)を質問項目として入れたが、回答率が0.8%であったため、今回の分析からは除外することとした。地域若者サポートステーションは、平成24年度現在、都内6か所(新宿、世田谷、板橋、足立、三鷹、立川)に設置されており、厚生労働省では、更に拡大を検討しているという。今後、中途退学者を支援する機関として期待されている。(地域若者サポートステーションの利用状況については、資料編8頁を参照)

〔学校層、ニート層に顕著な項目〕

- ・「ハローワーク・ジョブカフェ」、「職業訓練支援センター」の利用割合が他の層よりも低い。

〔ニート層に顕著な項目〕

- ・ニート層は「病院や精神保健福祉センター」の利用割合が他の層よりも高い。また、学校層や学習意欲層の「病院や精神保健福祉センター」の利用割合がニート層に次いで高い。

〔正社員に顕著な項目〕

- ・正社員層では「ハローワーク・ジョブカフェ」、「職業訓練支援センター」の利用割合が他の層よりも高い。

〔その他〕

- ・学校層においては、「退学した学校」の利用割合が比較的高い。

カ 中途退学者が今後どのような支援を求めているか〔調査票 問6-(3)に該当〕

(単位 %)

これからの将来の生活に向けてどのような支援があれば良いと思いますか。それぞれについて、あてはまる番号に1〇をつけてください。(4件法による質問)	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
A職業や資格取得の指導をしてくれる	90.2	80.4	73.3	77.9	85.4	76.2
B世の中で役立つ知識や能力を高めるための教室を開いてくれる	73.7	69.1	46.0	51.5	66.6	57.6
D仕事に就くための相談やアドバイスをしてくれる	82.2	65.5	52.6	66.4	81.3	71.2
G世の中のマナーやルールを学べる機会を提供してくれる	63.8	54.8	47.4	49.2	68.7	59.3
C再入学や高卒認定のための補習をしてくれる	68.6	64.9	54.0	55.7	62.5	57.6
E居場所やフリースペースを提供してくれる	61.0	53.6	43.4	43.5	58.4	55.9
F人間関係を円滑にできるような講習をしてくれる	44.6	45.3	34.2	33.8	50.0	57.6
H大学や専門学校の授業料を無料にしてくれる	83.5	83.3	53.9	72.2	66.7	67.8
I若者向けの公営の住宅を設置してくれる	70.4	70.3	63.2	71.8	75.0	54.2
J将来のために自由に使えるお金を区役所や市役所などが提供してくれる	66.2	60.1	63.2	66.7	68.7	49.1

※「すごくそう思う」、「まあそう思う」の割合の合計を指す。

※80%以上＝濃い網掛け 60%以上＝薄い網掛け

この質問では、中途退学者本人が今後どのような支援を求めているかを把握することをねらいとした。

〔各層に共通した事項〕

- ・全ての層において、「A 職業や資格取得の指導をしてくれる」といったニーズは高い。また、正社員層を除けば「D 仕事に就くための相談やアドバイスをしてくれる」ということへの支援ニーズも高い。
- ・上級学校へ進学するための支援やその他給付的な支援に関するニーズも各層において高い。

〔学習層に顕著な事項〕

- ・高卒資格の取得についての関心が高いのは、学習層（学校層・学習意欲層）である。

〔ニート層に顕著な事項〕

- ・ニート層では「F 人間関係を円滑にできるような講習をしてくれる」といったニーズが他の層よりもやや高い。

2 進路未決定卒業生追跡調査結果

(1) 回答者の基本属性

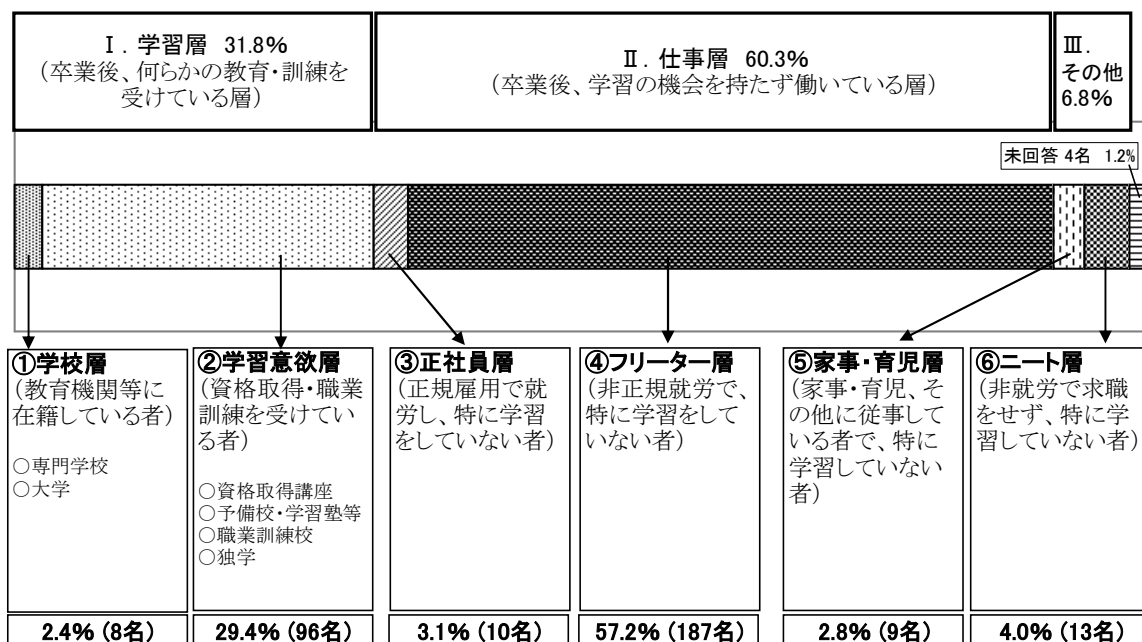
◆ 性別：男性	112名	(34.3%)
女性	213名	(65.1%)
未回答	2名	(0.6%)
◆ 通学していた高校の課程		
全日制	244名	(74.6%)
定時制 (学年制)	44名	(13.5%)
定時制 (昼夜間)	25名	(7.6%)
通信制	14名	(4.3%)
◆ 学科：普通科	254名	(77.7%)
専門学科	47名	(14.4%)
総合学科	21名	(6.4%)
未回答	5名	(1.5%)

(2) 調査分析の枠組み設定

「中途退学者調査」と同様の類型化を試みた。【14頁 参照】

その結果、①学校層 (8名、2.4%)、②学習意欲層 (96名、29.4%)、③正社員層 (10名、3.1%)、④フリーター層 (187名、57.2%)、⑤家事・育児層 (9名、2.8%)、⑥ニート層 (13名、4.0%) という構成比となった。(図表8)

図表8 進路未決定卒業生の類型別内訳



(3) 主な調査分析

類型化の結果、①学校層、③正社員層、⑤家事・育児層、⑥ニート層はサンプル数が少ないため、分析が可能な回答数のある②学習意欲層と④フリーター層に絞って「中途退学者調査」データとの比較分析を行うことにした。

ア 卒業できた理由

①高校在学時の状況〔調査票 問4-(1)に該当〕(単位 %)

高校時代を振り返ると、次のようなことはあなたにどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に1つ○をつけてください。(4件法による質問)	(進路未決定卒業者)		(中途退学者)	
	学習意欲	フリーター	学習意欲	フリーター
A勉強についていけなかった	24.0	43.8	36.9	28.9
B遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった	27.1	31.5	65.5	68.8
J通学するのが面倒だった	33.4	46.5	45.8	62.1
F自分の生活リズムと学校が合わなかった	12.5	24.6	37.5	41.1
D友人とうまくかかわれなかった	14.6	13.3	38.7	28.7
E精神的に不安定だった	19.8	28.3	51.8	36.2
H問題のある行動や非行をしてしまった	8.4	14.4	16.0	23.6
I学校から校則違反を注意されていた	13.5	30.0	20.8	29.5
L学校とは別に他にやりたいことがあった	24.0	20.8	29.8	29.2

※「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の合計の割合を指す。

※60%以上＝濃い網掛け ※40%以上＝薄い網掛け

②どのようなことが経験できたから、卒業できたと思うか(本人の考え)

〔調査票 問4-(5)に該当〕

(単位 %)

今、振り返ってみて、高校時代にどのようなことが経験できたから卒業できたと思いますか。あてはまる番号にすべて○をつけてください。	(進路未決定卒業者)		(中途退学者)	
	学習意欲	フリーター	学習意欲	フリーター
人付き合いがうまくできたから	45.8	42.8	38.7	27.7
友人や仲間からの手助けがあったから	44.8	51.3	17.3	11.4
先生の理解や応援があったから	29.2	32.1	22.0	19.7
規則正しい生活ができたから	18.8	15.0	29.2	31.1
通学しやすかったから	19.8	26.2	24.4	26.5
働くための知識や経験が学校で身についたから	15.6	14.4	11.3	12.2
勉強することの意味がわかったから	17.7	7.5	22.0	26.5
学校に自分の居場所があったから	42.7	41.2	29.8	20.9
特別なことはなかった	17.7	13.4	13.1	15.8

※類型ごと、上位3つを網掛け

この2つの質問では、高校在学時の状況と、進路未決定卒業者が卒業できた理由をどのように捉えているかを質問し、卒業できた理由をより詳細に把握することをねらいとした。中途退学者調査で①に対応している質問は、「退学した時の本人の状況」であり、②に対応している質問は「何があれば退学しなかったか」、という質問である。

〔中途退学者との比較〕

①高校在学時の状況〔調査票問4-(1)に該当〕

進路未決定卒業者のフリーター層は「A 勉強についていけなかった」が中途退学者よりも高い割合になっているが、それ以外の全ての項目で、中途退学者の方が高い割合となっている。

②どのようなことが経験できたから卒業できたと思うか〔調査票問4-(5)に該当〕

- ・進路未決定卒業者の学習意欲層、フリーター層の上位3つを占めたのが「人付き合いがうまくできたから」、「友人や仲間の手助けがあったから」、「学校に自分の居場所があったから」、といった、人間関係や自己肯定感に関係する事項であった。一方、中途退学者調査でも、「人付き合いがうまくできること」が高校生活において重要視する項目として挙げられている。これらのことは、学校生活において、友人との関わり、学校での自分の居場所ということが重要な要素となっていることを示している。
- ・中途退学者は、何があれば退学しなかったかという質問で「規則正しい生活ができること」への回答割合が比較的高い一方で、進路未決定卒業者へのどのようなことがあったから卒業できたかという質問では「規則正しい生活ができること」への回答割合は低かった。これは、高校を卒業した者にとっては、規則正しい生活をおくることは、当たり前のこととなっているとみることができる。

イ 卒業した高校を志望していたか〔調査票 問5-(2)に該当〕(単位 %)

卒業した高校をもともと志望していましたか。それぞれについて、あてはまる番号に1つ〇をつけてください。(4件法による質問)	(進路未決定卒業者)		(中途退学者)	
	学習意欲	フリーター	学習意欲	フリーター
	68.7	69.5	64.9	59.3

※「とても志望していた」、「まあ志望していた」の合計の割合を指す。

※60%以上＝濃い網掛け ※40%以上＝薄い網掛け

この質問は「中途退学者調査」と同じ質問である。

〔中途退学者との比較〕

- ・進路未決定卒業者は中途退学者よりも通学していた高校への志望度は高い。

ウ 高校に進学する時の本人の考え〔調査票 問5-(3)に該当〕(単位 %)

振り返ってみて、卒業した高校に進学する時にあなたはどのような考え方をもっていましたか。それぞれについて、あてはまる番号に1つ〇をつけてください。(4件法による質問)	(進路未決定卒業者)		(中途退学者)	
	学習意欲	フリーター	学習意欲	フリーター
A好きな学科や勉強したい学科があった	37.5	20.4	36.9	29.0
C成績で進学先を決めた	72.9	67.9	57.7	63.5
H高校に進学するのは当たり前だと考えた	88.6	81.3	76.8	62.0
I高校は将来の人生に役に立つと思った	86.5	74.9	72.0	62.0
J高卒の学歴が必要だと思った	88.5	85.6	81.5	72.7
Kなんとなく進学することにした	34.3	34.2	50.6	56.0

※「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の合計の割合を指す。

※60%以上＝濃い網掛け ※40%以上＝薄い網掛け

この質問は「中途退学者調査」と同じ質問である。

〔中途退学者との比較〕

- ・中途退学者との比較で顕著な差がみられるのは、「K なんとなく進学することにした」の割合が進路未決定卒業の方が低いことである。また、「H 高校に進学するのは当たり前だと考えた」という項目では、中途退学者より、進路未決定卒業の方が割合が高かった。このことから、進路未決定卒業の場合、「高校へ進学する」のが当然あるいは役に立つと考える者が中途退学者と比べ、比較的多いことがわかる。

エ 中学時代の生活はどうだったか〔調査票 問5-(1)に該当〕(単位 %)

中学時代の生活はどうでしたか。それぞれについて、あてはまる番号に1つ○をつけてください。	(進路未決定卒業)		(中途退学者)	
	学習意欲	フリーター	学習意欲	フリーター
(1) 出席状況はどうだったか	87.5	79.2	50.6	56.4
(2) 成績はどうだったか	56.2	38.6	50.0	27.0
(3) 部活動に取り組んでいたか	66.6	54.1	51.2	47.0

※「よかった(よくやった)」、「まあよかった(よくやった)」の合計の割合を指す。

※60%以上＝濃い網掛け 40%以上＝薄い網掛け

この質問は「中途退学者調査」と同じ質問である。

〔中途退学者との比較〕

- ・学習意欲層、フリーター層ともに(1)出席状況、(2)成績、(3)部活動のいずれにおいても、中途退学者よりも進路未決定卒業の方が高い値を示している。このことから、中途退学者と比べ、進路未決定卒業の方が相対的に安定した中学生生活を送っていたことが推察される。

オ 高校卒業後の若者支援機関の活用状況〔調査票 問4-(6)に該当〕(単位 %)

卒業してから今までに、若者を支援するための次のような機関や施設、サービスを利用したり、訪問したりしたことがありますか。あてはまる番号にすべて○をつけてください。	(進路未決定卒業)		(中途退学者)	
	学習意欲	フリーター	学習意欲	フリーター
ハローワークやジョブカフェ	44.8	31.0	16.1	16.1
職業訓練支援センター	0.0	2.1	2.4	1.2
病院(心療内科など)や精神保健福祉センター	4.2	3.7	16.1	4.6
カウンセラーや心の相談機関	2.1	0.0	8.3	3.4
卒業した学校	15.6	13.9	9.5	4.1
特に利用したことはない	45.8	64.7	54.8	71.3

※類型ごと、上位3つを網掛け

この質問は「中途退学者調査」と同じ質問である。

〔中途退学者との比較〕

- ・中途退学者よりも進路未決定卒業の方が、学習意欲層、フリーター層ともに、「ハローワー

クやジョブカフェ」の利用が高い。このことから、進路未決定卒業者は、就労への意思を持って行動していることが読み取れる。

- ・進路未決定卒業者は、「病院や精神保健福祉センター」の利用率も低い傾向が見られる。
- ・進路未決定卒業者では、中途退学者よりも、「卒業した学校」への利用がやや高い傾向がみられる。

カ 進路未決定卒業者が今後どのような支援を求めているか

〔調査票 問6-(3)に該当〕(単位 %)

これからの将来の生活に向けてどのような支援があれば良いと思いますか。それぞれについて、あてはまる番号に1つ○をつけてください。(4件法による質問)	(進路未決定卒業者)		(中途退学者)	
	学習意欲	フリーター	学習意欲	フリーター
A職業や資格取得の指導をしてくれる	88.5	80.2	80.4	77.9
B世の中で役立つ知識や能力を高めるための教室を開いてくれる	80.2	61.5	69.1	51.5
C仕事に就くための相談やアドバイスをしてくれる	85.4	75.4	53.6	43.5
F世の中のマナーやルールを学べる機会を提供してくれる	76.0	64.7	83.3	72.2
D居場所やフリースペースを提供してくれる	66.7	60.4	65.5	66.4
E人間関係を円滑にできるような講習をしてくれる	53.1	47.1	45.3	33.8
G大学や専門学校の授業料を無料にしてくれる	84.4	74.9	54.8	49.2
H若者向けの公営の住宅を設置してくれる	77.1	69.5	70.3	71.8
I将来のために自由に使えるお金を区役所や市役所などが提供してくれる	66.7	67.4	60.1	66.7

※「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の合計の割合を指す。

※80%以上＝濃い網掛け 60%以上＝薄い網掛け

この質問は「中途退学者調査」と同じ質問である。

〔中途退学者との比較〕

- ・中途退学者とほぼ同じ傾向を示しているといえるが、進路未決定卒業者の方が「A 職業や資格取得の指導をしてくれる」「B 世の中で役立つ知識や能力を高めるための教室を開いてくれる」「C 仕事に就くための相談やアドバイスをしてくれる」という項目の回答率が高い。これは、中途退学者に比べ進路未決定卒業者の方が、就労に対し高い意識を持っているとみることができる。

第4章 調査結果のまとめ

1 調査結果のまとめ方

調査結果の概要（第3章）を踏まえ、第4章では、調査結果のまとめを行う。まとめは、以下の手順で行うこととする。

〔調査のまとめの手順〕

1) 第3章で類型化した各層の特徴の整理

(①「学校層」、②「学習意欲層」、③「正社員層」、④「フリーター層」、⑤「家事・育児層」、⑥「ニート層」ごとに特徴を整理する)



2) 主たるターゲットの特徴の分析



3) 中途退学者追跡調査と進路未決定卒業者追跡調査との比較

2 中途退学者追跡調査における各層の特徴

各層における回答内容を整理したものが31～32頁の図表9である。これを踏まえ、各層の特徴を以下に整理する。

(1) 共通に見られた特徴

「高校中途退学理由」をみると、いずれの層においても共通していたのが、「遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった」と「通学するのが面倒だった」ということである。これは、中途退学者に共通の傾向として、規則正しい生活習慣を確立できなかったという課題があったということがわかる。

また、正社員層を除く各層において割合こそ異なるが、共通して「精神的に不安定だった」と回答していることも挙げられる。

加えて、若者支援機関等の活用についてであるが、「特に利用したことはない」と回答した割合が各層において圧倒的に高いという結果が出ている。

図表9 都立高校中途退学者追跡調査 整理表

類型	I 学習層		II 仕事層		III その他層	
	学校層	学習意欲層	正社員層	フリーター層	家事・育児層	二・三層
構成比	21.6% (213名)	17.0% (168名)	7.7% (76名)	41.6% (411名)	4.9% (48名)	6.0% (59名)
中学時代	◆出席 62.0% ◆成績 43.7% ◆部活動 57.3%	◆出席 50.6% ◆成績 50.0% ◆部活動 51.2%	◆出席 61.8% ◆成績 30.3% ◆部活動 52.6%	◆出席 56.4% ◆成績 27.0% ◆部活動 47.0%	◆出席 54.2% ◆成績 25.0% ◆部活動 37.5%	◆出席 30.5% ◆成績 23.7% ◆部活動 18.7%
高校望校度の	54.5%	64.9%	46.0%	59.3%	62.5%	67.8%
高校入学目的	①学歴が必要77.9% ②将来の役に立つ71.4% ③進学は当然70.9% ④成績で進学62.4%	①学歴が必要81.5% ②進学は当然76.8% ③将来の役に立つ72.0%	①学歴が必要68.4% ②なんとなく進学60.5%	①学歴が必要72.7% ②成績で進学63.5% ③進学は当然62.0% ③将来の役に立つ62.0%	①学歴が必要77.1% ②なんとなく進学62.5% ③将来の役に立つ60.4%	①学歴が必要69.5% ②将来の役に立つ64.4%
高校中途退学理由	①遅刻や欠席が多かった59.1% ②通学が面倒55.4% ③精神的不安定46.9% ④友人とかわかれぬ44.6% ⑤生活リズムが合わない43.2%	①遅刻や欠席が多かった65.5% ②精神的不安定51.8% ③通学が面倒45.8%	①通学が面倒64.5% ②遅刻や欠席が多かった63.2% ③学校とは別にやりたいことあり48.7% ④問題行動があった44.8% ⑤校則違反があった43.4%	①遅刻や欠席が多かった68.8% ②通学が面倒62.1% ③生活リズムが合わない41.1%	①遅刻や欠席が多かった70.8% ②通学が面倒60.4%	①遅刻や欠席が多かった57.6% ①精神的不安定57.6% ③通学が面倒52.5% ④友人とかわかれぬ47.4%
中途退学後の進路	①通信制44.6% ②定時制21.6% ③専門学校16.0% ④大学9.9% ⑤全日制8.0%	①独学53.6% ②資格取得14.9% ③サポート校11.9% ④その他11.9% ⑤予備校(大学進学)6.0%	正社員	フリーター (非正規就労)	家事、育児	就労していない 求職していない 教育・訓練を 受けていない
	1)正社員0.5% 2)非正規67.1% 3)家事育児4.7% 4)働いていない27.7%	1)正社員7.1% 2)非正規63.7% 3)家事育児6.5% 4)働いていない22.6%				

類型	I 学習層		II 仕事層		III その他層	
	学校層	学習意欲層	正社員層	フリーター層	家事・育児層	ニート層
構成比	21.6% (213名)	17.0% (168名)	7.7% (76名)	41.6% (411名)	4.9% (48名)	6.0% (59名)
若者の支援機関の活用	①特に利用なし64.8% ②退学した学校12.7% ③病院等12.2%	①特に利用なし54.8% ③病院等16.1% ③ハローワーク 16.1%	①特に利用なし72.4% ②ハローワーク26.3%	①特に利用なし71.3% ②ハローワーク16.1%	①特に利用なし68.8% ②ハローワーク20.8%	①特に利用なし66.1% ②病院等20.3% ③心の相談機関11.9%
今後の支援	①職業や資格取得90.2% ②大学等授業料83.5% ③仕事につくためのアドバイス82.2% ④知識や能力を高める教室73.7% ⑤公営住宅の設置70.4%	①大学等授業料83.3% ②職業や資格取得80.4% ③公営住宅の設置70.3%	①職業や資格取得73.3%	①職業や資格取得77.9% ②大学等授業料72.2% ③公営住宅の設置71.8%	①職業や資格取得85.4% ②仕事に就くためのアドバイス81.3% ③公営住宅の設置75.0%	①職業や資格取得76.2% ②仕事に就くためのアドバイス71.2%

(2) 学校層の特徴

- ◇ 中途退学後進学した学校は、約 45%が通信制、約 22%が定時制となっている。また、この層の約 67%が非正規就労という形で働いている。
⇒ 以上のことから、「通信制高校＋非正規就労」及び「定時制高校＋非正規就労」というパターンが学校層の特徴であるといえる。
- ◇ この層に属する者の中学時代は、出席状況はおおむね良好であり、部活動にもそれなりに取り組んでいる。
- ◇ また、「精神的に不安定だった」を中途退学理由に挙げた者に「病院や精神保健福祉センター」を支援機関として利用していると回答した者の割合が比較的高い。

(3) 学習意欲層の特徴

- ◇ 中途退学後に資格取得等の学習を行っている者は約 54%が独学という状況である。
⇒ 「独学＋非正規就労」というパターンが学習意欲層の特徴として言える。
- ◇ 若者支援機関等の活用状況では、「病院や精神保健福祉センター」の利用が他の層と比べると高い。

(4) 正社員層の特徴

- ◇ 退学の理由として「別にやりたいことがある」、「問題のある行動や非行をしてしまった」、「学校から校則違反を注意されていた」と回答した者の割合が他の層よりも高い。
- ◇ 退学の理由として、精神的に不安定を挙げる者の割合が他の層よりも低い。
- ◇ この層に属する者の中学時代は、出席状況、部活動への参加は比較的安定しているが、成績が良い（又はやや良い）と回答した者の割合が低い。
- ◇ 若者支援機関等の活用状況では、「ハローワーク」を挙げている者の割合が他の層に比べて高い傾向にある。

(5) フリーター層の特徴

- ◇ この層は、全体の回答者の 41.6%を占め、回答者の中で最も多い類型となっている。
- ◇ 中途退学理由として「自分の生活リズムと学校が合わなかった」、「精神的に不安定だった」を挙げる者の割合が他の層よりもやや高い。
- ◇ この層に属する者の中学時代は、出席状況は比較的安定（約 56%）しているが、部活動への参加状況（約 47%）は、やや低い傾向がある。
また、成績が良い（又はやや良い）と回答した者の割合が低い。
- ◇ 若者支援機関等の活用状況では、「ハローワーク」を挙げている者の割合が比較的高い。

(6) 家事・育児層の特徴

- ◇ 中途退学理由として、「別にやりたいことがある」と回答した者の割合が他の層よりやや高い。
- ◇ この層に属する者の中学時代は、出席状況は比較的安定（約 54%）しているが、成績が良い（又はやや良い）と回答した者の割合が低く、部活動への参加もやや低い傾向である。
- ◇ 若者支援機関等の活用状況では「ハローワーク」を挙げている者の割合がやや高い。

(7) ニート層の特徴

- ◇ この層に属する者の中学時代は、出席状況（約 31%）、成績（約 24%）、部活動への参加（約 19%）といずれも低い傾向となっている。
- ◇ 若者支援機関等の活用状況では「病院や精神保健福祉センター」（約 20%）と「カウンセラーや相談機関」（約 12%）が上位に挙げられており、他の層と比べ精神的な課題を抱えている傾向がある。

3 中途退学者の学校層、学習意欲層とフリーター層の分析

全体の 80.2%（ボリュームゾーン）を占める「学校層」、「学習意欲層」と「フリーター層」の分析は以下のとおりである。

「学校層」、「学習意欲層」と「フリーター層」においては、中学時代の生活、中途退学理由において回答傾向が類似しているが、以下の項目で回答傾向が異なっている。

【「学校層」、「学習意欲層」及び「フリーター層」で回答傾向の異なる項目】

① 中学時代の生活について〔問 5-(1)〕

- ・ 中学時代の成績について、「とてもよかった、まあよかった」と回答した者の割合

〔学校層〕 43.7% 〔学習意欲層〕 50.0% ⇔ 〔フリーター層〕 27.0%

- ※ 〔フリーター層〕の方が、中学時代の成績が「良くなかった」と回答した者の率が高い。

② 高校を中途退学した理由について〔問 4-(1)〕

- ・ 「E 精神的に不安定だった」という質問に対し、「とてもあてはまる、まああてはまる」と回答した者の割合

〔学校層〕 46.9% 〔学習意欲層〕 51.8% ⇔ 〔フリーター層〕 36.2%

- ※ 〔学校層〕、〔学習意欲層〕の方が、精神的に不安定と回答した者の率が高い。

③ 中途退学者が今後どのような支援を求めているかについて〔問 6-(3)〕

- ・ 「F 人間関係を円滑にできるような講習をしてくれる」という質問に対し、「とてもあてはまる、まああてはまる」と回答した者の割合

〔学校層〕 44.6% 〔学習意欲層〕 45.3% ⇔ 〔フリーター層〕 33.8%

- ※ 〔学校層〕、〔学習意欲層〕の方が、対人関係支援を望む率が高い。

4 中途退学者の学校層、学習意欲層とフリーター層にみる男女の回答差

ここでは、「学校層」、「学習意欲層」、「フリーター層」を中心に、男性と女性の間で回答率に差のあった質問項目について、検討する。

「中途退学をした理由」を質問した問4-(1)の質問では、

- ・「E 精神的に不安定だった」の「学校層」、「学習意欲層」、「フリーター層」はいずれも、女性の回答率の方が高かった。
- ・一方「H 問題のある行動や非行をしてしまった」という項目では、「学校層」、「学習意欲層」、「フリーター層」のいずれも、男性の回答率が高かった。

退学した時を振り返ると、次のようなことはあなたにどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に1つ○をつけてください。(4件法による質問)						
	学校	(男)	学習意欲	(男)	フリーター	(男)
		(女)		(女)		(女)
E精神的に不安定だった	46.9	33.7	51.8	43.9	36.2	19.3
		59.3		61.0		48.3
H問題のある行動や非行をしてしまった	20.7	29.8	16.0	18.3	23.6	31.6
		12.0		13.4		18.1

「どのようなことがあれば、中途退学をしなかったと思うか」と質問した問4-(5)では、

- ・「人付き合いがうまくできること」の項目において、「学校層」、「学習意欲層」、「フリーター層」のいずれも、女性の回答率が高かった。
- ・「学校が自分の居場所であること」の項目においても、「学校層」、「学習意欲層」、「フリーター層」のいずれも、女性の回答率が高かった。

今、振り返ってみて、どのようなことがあれば退学しなかったと思いますか。あてはまる番号にすべて○をつけてください。						
	学校	(男)	学習意欲	(男)	フリーター	(男)
		(女)		(女)		(女)
人付き合いがうまくできること	36.2	28.8	38.7	35.4	27.7	22.2
		43.5		41.5		31.5
学校に自分の居場所があること	31.9	24.0	29.8	24.4	20.9	15.2
		38.9		35.4		24.8

中途退学後の若者支援機関の活用状況について質問した問4-(6)では、

- ・「ハローワークやジョブカフェ」の活用について「学校層」、「学習意欲層」、「フリーター層」のいずれも男性の回答率が高かった。
- ・「病院（心療内科など）や精神保健福祉センター」の活用について「学校層」、「学習

意欲層」、「フリーター層」のいずれも女性の回答率が高かった。

退学してから今までに、若者を支援するための次のような機関や施設、サービスを利用したり、訪問したりしたことがありましたか。あてはまる番号にすべて〇をつけてください。

	学校	(男)	学習意欲	(男)	フリーター	(男)
		(女)		(女)		(女)
ハローワークやジョブカフェ	6.6	9.6	16.1	24.4	16.1	18.1
		2.8		7.3		14.7
病院(心療内科など)や精神保健福祉センター	12.2	4.8	16.1	9.8	4.6	0.6
		19.4		22.0		7.6

【男女の回答差が出たもの】

- ① 精神的な不安定を抱えて、病院（心療内科など）や精神保健福祉センターを活用するという傾向は、女性の方に顕著に表れている。
- ② 一方、男性の回答率が高かったのは、ハローワークやジョブカフェの活用といった就労を意識していることが表れている。

5 中途退学者と進路未決定卒業者との比較

今回の調査では、中途退学者を対象とした調査と並行して、比較検討をするために進路未決定卒業者を対象とした調査を行った。

「中途退学者調査」と「進路未決定卒業者調査」で比較可能な層は、回答者数の多かった②学習意欲層と④フリーター層の2つである。これらの層は、「中途退学者調査」及び「進路未決定卒業者調査」ともに、母集団の中で大きなウェイトを占めている。

両者の調査結果を比較して、大きな差が見られた質問項目を挙げると以下の図表 10 のようになる。

図表 10 高校中途退学者と進路未決定卒業者の間で回答傾向の異なる事項

中途退学者	質問事項	進路未決定卒業者
[学習意欲層] 51.8%	問4(1) (高校時代を振り返って) E 精神的に不安定 だった	[学習意欲層] 19.8%
[フリーター層] 36.2%		[フリーター層] 28.3%
[学習意欲層] 29.2%	問4(5) (高校時代どのようなことが あれば卒業できたか) [あったので卒業できた] 規則正しい生活が できること	[学習意欲層] 18.8%
[フリーター層] 31.1%		[フリーター層] 15.0%
[学習意欲層] 17.3%	問4(5) (高校時代どのようなことが あれば卒業できたか) [あったので卒業できた] 友人や仲間からの手 助けがあること	[学習意欲層] 44.8%
[フリーター層] 11.4%		[フリーター層] 51.3%
[学習意欲層] 50.6%	問5(1) 中学時代の生活はどう でしたか? A 出席状況 (とてもよかった、 まあよかったの計)	[学習意欲層] 87.5%
[フリーター層] 56.4%		[フリーター層] 79.2%

図表 10 から見える課題を整理すると、以下の 4 点に整理される。

中途退学者は、進路未決定卒業者と比べ

- 1) 精神的な課題を抱えているケースが多い。
- 2) 規則正しい生活習慣が確立していない。
- 3) 高校生活における友人関係をそれほど重視していない傾向が高い。
- 4) 中学時代の出席状況が良好ではない。